

弥生やよいも末の七日、あけぼのの空ろうろう朧々と

して、月は有明にて光を（お）さまされるものか

ら、富士の嶺みねがかすかに見えて、上野・谷中やなか

の花の梢こずえ、またいつかはと心細し。むつま

しき限りは宵よりつどひて、舟に乗りて

送る。千住せんじゆといふ所にて舟上がれば、

前途せんど三千里の思ひ、胸にふさがりて、幻

のちまたに離別りべつの泪なみだをそそぐ。

行く春や 鳥啼なき魚うをの 目は泪

※矢立 携帯用の筆記用具

これを矢立やたての初めとして、行く道なを進

まず。人々は途中みちなかに立ちならびて、後ろ

かげの見ゆるまではと、見送るなるべし。

三月も末の二十七日、明け方の空はおぼろに霞み、

月は有明となつてうすく照らしているので、

富士山の嶺がかすかに見わたすことができる。上野や谷中の

桜の梢はいつまた見られるかと心細い思いにかられる。私を思ってくれている親しい人々は

みな昨夜から集まり、一緒に船に乗りこんで

見送ってくれる。千住というところで船をあがれば、

いよいよこれから前途はるかな道のりの一步を踏み出したという感慨で胸がいっぱいになり、幻

のようにはない現世における別れと知りながら、思わず惜別の涙が落ちるのだった。

行く春や鳥啼き魚の目は泪(うららかな春が刻々と過ぎ去ろうとしている。それを惜しんで鳥

は鳴き、魚も目に涙を光らせているように思われるものだ。)

この句を、旅の句の初めとして足を踏み出すが、名残りが尽きず、

なかなか先に進まない。人々は道に立ち並んで、後ろ

姿が見えるまではと、見送ってくれるのだろう。

夏草「おくのほそ道」から 資料④「松島」

※扶桑 日本の異称

そもそもことふりにたれど、松島は扶桑第一

※好風 好風景の略

※洞庭・西湖 中国の美しい景色の代表的なもの

の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ぢず。東

南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を

湛ふ。島々の数を尽くして、歌つものは天を指

さし、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にか

さなり、三重に畳みて、左に分かれ右に連なる。

負へるあり抱けるあり、児孫愛すがごとし。松の

緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたはめて、屈曲

をのづから矯めたるがごとし。その気色よう然と

して美人の顔を粧ふ。ちはや振る神の昔、

大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの

人か筆をふるひ、詞を尽くさむ。

さて、すでに言い古されていることだが、松島は日本一

風景のよいところであり、中国の名勝地の洞庭湖や西湖と比べても恥ぢずかしくないほどだ。

その作りは東南から湾内に水を入れたようになっており、湾の中は三里もあって中国の浙江の

ように海水で満ちている。島の数は限りなく多く、それらの中で、そびえ立っているものは

天を指しているようであり、低く横たわるものは腹ばいになっているようである。二重に

重なっているもの、三重に畳まれたようなものもある。はたまた、左のほうに分断されているかと思えば、右の島と続いたりする。

小さな島を背負うような形のものもあれば、抱いているような形もあり、まるで子供や孫を愛しんでいるかのようなのである。松の

緑も色濃く、枝葉は潮風に吹き曲げられている。その姿は、自然とそうなったのだが、

いかにも人が程よい形に折れ曲げたようにも見える。それらの景色の美しさには趣きがあり、

美人が美しく化粧をしている顔にも例えられるだろう。神様がいた遠い時代に、

山の神である大山祇神がなされた仕業なのだろうか。天地万物をつくられた神の働きは、いかに

技を振るっても、うまく描きも、言い表しもできるものではない。

南部地方に続いている道を遠くに望み見て、岩手の里に泊まった。小黒崎や美豆の小島を通り過ぎ、鳴子温泉から尿前の関に差ししかかって出羽の国へ越えて行くこうとした。この道は旅人がめったに通らないので関所の番人に怪しく思われ、ようやく関を越すことができた。大きな山を登って行くうちに既に日が暮れてしまったので、封人の家(国境の番人の家)を見かけて一夜の泊りをたのんだ。しかし、三日間雨風が激しかったため、わびしい山中に逗留することになった。

蚤虱馬の尿する枕もと

(蚤や虱に悩まされる旅夜ではあるが、人と住まいを共にする習いの中、馬が枕もとで小便をするというのも心安く趣があるものだ。)

宿の主人が言うには、ここから出羽の国に行くには、間に大きな山があって、道もはっきりしていないので、道案内の人を頼んで越えていくのがよい、とのことだった。それならばと言って人を頼んだところ、いかにも力が強そうな若者が、反脇差を腰に差し、櫛の木の杖をもって我々の先に立って歩いて行く。今日こそきつと危険な目にあいそうな日であると、びくびくしながら後について行く。宿の主人が言った通り、山は高く木々が生い茂って鳥の声一つ聞こえず、枝葉が茂り合って木の下を暗くし、まるで夜を行くようである。杜甫の詩に「靄雲端ニうんたんにツチふる」とあるように、大風が土や砂を吹き上げて雲の端から吹き降ろすときのような心もとない心地で、笹やぶの中を踏み分け踏み分けて進み、時には水を渡り、岩につまずいて冷や汗を流し、やっとのことで最上の庄に出た。あの案内の男は、この道では必ずなにか良くないことが起る。何事も無く送ることができて本当に幸いだったと言って、喜んで別れて行った。後になって聞いてさえ、胸がどきどきするばかりであった。

山中温泉に入る。その効用は、有馬温泉に次ぐという。

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

(菊の露を飲んで七百歳まで生きたという菊兒童の伝説があるが、ここ山中では菊の力によらずとも、この湯の香りを吸っていると十分に長寿のききめがありそうだ。)

主人にあたるものは久米之助といって、いまだ少年である。その父は俳諧をたしなむ人だ。京都の安原貞室がまだ若い頃、ここに来た時俳諧の席で恥をかいたことがある。貞室はその経験をばねにして、京都に帰って松永貞徳に入門し、ついには世に知られる立派な俳諧師となった。名声が上がった後も、貞室は(自分を奮起させてくれたこの地に感謝して)俳諧の添削料を受けなかったという。こんな話ももう昔のこととなってしまった。

曾良は腹をわずらって、伊勢の長島というところに親戚がいるので、そこを頼って一足先に出発した。

行き行きて倒れ伏すとも萩の原 曾良

(このまま行けるところまで行って、最期は萩の原で倒れ、旅の途上で死のう。それくらいの、旅にかける志である。行く者の悲しみ、残る者の無念さ、二羽で飛んでいた鳥が離れ離れになって、雲の間に行き先を失うようなものである。)

私も句を詠んだ。

今日よりや書付消さん笠の露

(ずっと旅を続けてきた曾良とはここで別れ、これからは一人道を行くことになる。笠に書いた「同行二人」の字も消すことにしよう。笠にかかる露は秋の露か、それとも私の涙か。)